



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
7月号

通巻 659 号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年7月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



「ひまわり」(油絵)

大和郡山市 松下広美さん画 (文・7頁)

視会での法主との座談から

現界と霊界をめぐって (上)

法主 矢追日聖と参加者たち

大倭の視会では個人的な事情を語ることも多く、原則として録音や映像による記録はしていません。ところが古いテープの中に珍しく今号と次号で紹介する記録が発見されたので、歳月も大分経過していることも考慮して、差し支えない範囲で発表することにしました。

この視会の時期はオウム真理教について語っている内容から察するに平成の初め頃だと思われます。

編集部

金縛りは霊体の悪戯

女性 私もなんとなく誰かいるような気がするんです。

法主 肉体を持っていない霊体で？

女性 ええ。

法主 そんな時は霊体がね、ちよつと悪戯しに来る。金縛りにあうというのは、そんな時に来るんやけどね。そうなたらやっぱり声も出ないでしょ。身体が動かない。出ていくまでどれくらい時間がかかります？

女性 ちよつと長かった。どうもなかったと思います。

法主 まあ時間を計っていないからな。何回かありますか？

女性 昔ちよつとだけありましたけど。よく考えたら初めて。怖くはなかったです。

法主 金縛りに出て来るのは死んだ人の

姿を見せに来るからで、そんなのは悪戯やからな。今あんた主人おんの？

女性 はい。

法主 大抵そういう種類のは主人おつたら出て来ないね。

女性 ああ、そうですか。

法主 まあ、ちよつとした悪戯やね。あんまり気にすることいらんけどね。

女性 引っ越した方がよろしいですか？

法主 仲よろしとつたらええねん。そんなん肉体のない奴やからな。そう心配はいらんけどね。大抵金縛りになったという人は、邪霊の場合やけれど悪戯しに来るのが多いねん。そんな場合には金縛りになる場合が多い。あんたなんか感じる人やからね。迫力というか自分から出て来る霊気が強い人であればそんな悪戯は出て来ない。けどまああんたも優しい。それで出てくんねけどな。同じ霊的障害を受けるにしても、家族3人おつたかてその中の一番かかりやすい人に出て来るねん。みんな同じようにかかるわけやない。人によって違うんですね。

霊を感じるのとは能力ではない

男性 霊的な体験する人は友達にもいるんですけども、僕は今までそういう体験が一切ないんですよ。霊を感じるとか感じないとかいうのは、そういうものを受信する力があるとかないとか、その人の能力みたいなものがあるんですか。

法主 能力があるようなことを人は言うけどね。そんなんじゃないですよ。こんなもの誰でも感じてるんやけど、分からんだけであつてね(笑)。

この間、テレビでなんとか教というのをやっていただけ、なんかいろんなややこしいのやつとる。

たしかオウム真理教と言うつたけど、あんなもの誰でもなるねんで。なにもあそこの宗教に入つたからあんなになつたんと違ふねん。あれは自分の自律神経がね、一種の神経運動や。あんなになつたら、あんたきつとびっくりするやろ。テレビで見えたらなんか手振つてひっくり返つたりしとつたけど、私はまああんなのは一種の神経運動と言てる。自分の意志以外のところであんなこと起こるねんから。だから自分はこんなことやつたら格好悪いと思つても勝手にそうなつて来んねんしね。声出したら傍(たが)が迷惑やと思うたかて声は出るしね。そりやもう氣違いじみて来る。

それをああいいうようなやこしい宗教団体ではね、お前は超能力がある、お前はこの宗教に対して命懸けでやらないかとかね、そんな洗脳をされるねん。自分の意志以外でなつたもんやから、命懸けでやっていきよんねんと思うわ。親がなると言つたかてあかん。うち(※大倭のこと)に来る人の中でもあんななる人たくさんおるよ。おるけど私は正しく指導してやるから、あんな氣遣いみたいにならんだけのことや。

こないだオウム真理教をテレビで見てて、なんとまあ可哀想になあ、こんなところに入つてなあと思つた。こないなつて来た時、自分は特別な能力があると思うとんやね。そんなん誰でもなんねん。ああいうようなひとつの雰囲気作ると自分から出て来る霊波が活発になるんや。それに引かなかつたらあんなふうになんねん。うちでも一時ね、学生たちがたくさんおつた昭和40年頃(※実際は昭和38年頃)、その中でひとりちよつと感じやすい人がいて、私がこうして話しとつたらブアーつとやりだしてん。始めびっくりしとつた、何事起つたかと思つて。本人は学生やからね、俺はマルキストやと言つてんねけど、勝手にこんなんな

つて来る。最後になつて来たからね、「助けてくれ」と言つとんねん。昭和40年頃の大学生やから、マルキストが多いがな。その人も普通のズボンをはいとるんやけど、そのズボン裂けてくんねん(※当時の拜殿は板間の上に筵一枚だった)。私の所に這いながら出て来んねん。俺はマルキストやと言つとつたかて私の所に出て来る。自分はそんなものに支配されないよと思つて抵抗しとんねけど、身体がいふこと聞いてくれへん。こんな時に隣で「俺はあんな氣違いみたいにならんぞ」言うてる人がね、なんかまたバーンとこけたり叫んだりして、本人もびっくりしたりね。そりやまあ一時そんなおもしろいこともあつた。しまいは学生の中でそんなことにならん者がね「格好悪い」と言い出して(笑)。ちやうど今のオウム真理教見とつたらそっくりや。

交流出来るのは 死んだ人と生きている人

男性 今テレビの話が出ましたけど、丹波哲郎さんいではりますね。みなさんご存知だと思いますけど。「私は霊界の宣伝マン」とか言うてます。あの方のことは先生どう思われますか。

法主 まあ、ああいう部分もあると思いますけど、あんなものを霊界とか思つていたら大間違ひ。もし丹波哲郎さんが本当に霊界のこと分つてはつたらあんなアホなこと絶対言いません。分らんから言えますけどね。霊界の一部をつかんでる人は世間にたくさんおりますねん。柔道で首締まって落ちる人いてますねん、その間は霊界に行つてると思ふんやけどね。

「三途の川」やの「奇麗な草花あるところ歩いた」やの「後ろから引っ張られて帰つて来た」

とか言うておるけれども、あれは肉体そのものは死んでない、生きている。あれは夢の世界です。本当の世界と違いますね。自分が行き切れなかったら霊界のこと分からんからね。ところが丹波さんの言うてんの聞いとったら、首が締まって昏睡状態になった時のことを話に聞いて、霊界としてある程度体系立てて言うてはんね。ああいうような部分もあるんやけど、私から言わしたらあれは夢の世界や。なに言われたって傍の者はなにも分らんやろ（笑）。

男性 霊界の世界では低い段階ということですか？ 霊界では高い所低い所があるんですか？

法主 高い所も低い所も色々ありますね。だだけ高い所へいく人なんかはそうはないやろうけどね。

男性 人間はやっぱり死ななければ霊界には行けないということですね。

法主 そうです、そうです。

男性 行って帰れることも出来ないし。

法主 そう。行って帰ることも出来ません。

男性 霊界に行った時には亡くなった時の年齢で行くわけですか？

法主 亡くなったその時の気持ちで霊界に行くわけです。

男性 向こうへ行ったらもう体はないですけども、あの、精神的なと言いますか、実際こっこの時の年齢やその時の気持ちのままに行くわけですね。

法主 自分の心そのまま、霊界にひとつの世界が出来ます。

男性 そうですか。現界で親子、兄弟であればみんな霊界に行きましてもやっぱり親子であり兄弟であるわけですか？

法主 それはもうバラバラですね。

男性 バラバラですか？ 全く他人ですか？

法主 生きてる人と死んでる人とは交流出来ます。血のつながりやから出来るけれども霊界に入

ってしもうたら、親子であつても兄弟であつても霊的な波長が違うんで一緒に出来ません。兄弟であつても親であつても子供であつても、精神内容は全部同じということはないんやから。みんな違うんやからね。その精神内容は霊波長やから。霊波長はみんな交差するから、めったに会えせん。

今言うたように、祭典や東光大祭のような時にはそれを司っている上位の霊界人がおりますね。それが今日全部開放せい言うてね。それで私がここの一応回向供養する人は全てここに寄つて来てみんな会えるわけやわな。その喜びでもつて神祭りには踊りがあつたり、音楽があつたりね。現界人と霊界人が共に楽しくなるといわけや。仏教でもそれで盆踊りをしたり。まあそういうふうなところで。大体そんな程度に思つてもらつたら間違いないです。

男性 ありがとうございます。

本当のものが心に残る

法主 そりや夫婦、兄弟でも肝心の心は違うんですもんね。けど肉体を持つてるのはやっぱり幸せですね。話しようと思つたら話出来るし、喧嘩しようと思つたら喧嘩出来るし、仲ようしようと思つたら仲ようなんねんから。せやから生きてる時は一日でも長生きして楽しまんとね。霊の世界に行つたら帰つてこれへんで。

だから恋愛なんかでふたり手をとって亡くなつても、霊界に行つたら全部バラバラです。絶対一緒になつてません。

男性 この世で添えなかつたからあの世へ行つて

添いましよう、霊界で一緒になりましようてもあきませんね。そういうことですね。

法主 たまに私のとこに死んだ人はどうですかと言つて訪ねて来られます。そんな時は私の霊波長によつて亡くなつた人同士波長をあわせて会わせます。両方あわせたら一緒にこう寄せることが出来ます。一時会えますが、その代わりそれが済んだらもう会えせん。

今あんたらと先祖さん会うてるはずですね。これはなにも私が寄せなくても現界人と霊界の人やからこれ会えますね。自分の家でね、お供えしたり、お祭りする度に会うてはんねん。けれども死んだ人同士は会えせんねん。私は今日ここで両方見た時、あんたらの亡くなられた人はどちらも大体よく似たとこにいてはります。ええとこにいてはります。

男性 今まで通りにお祀りしておればいいわけですね。

法主 それで結構ですよ。とにかくね、敬遠したらあかんよ。なんでもみんな仲良うしていく。だからあんな宗教やから、この宗教やからと、そんなこと思つてもあかん。人間の肉体でもね、ご飯も食べてる、おかずも食べてる、洋食食べる肉も野菜も食べると、なんやかやねみんな胃袋へ放り込んでるからね。放り込めばその中で血になつたり骨になつたり細胞になつたりする。それで大便になつたり小便になつたりするわけや。自然に分けてくれるわな、それが自然の姿や。

あれがええからこれが悪いからと、そんなこと思つてやつたら絶対あかんねん。なんでもええ、宗教と名のつくものやつたら、なんでもかまへん。みんな「食つて」しもたらええねん。そしたら自分の心の中でなんとか教えてくれんねん。それを脳みそが捌いてくれんねん。そやから思想的な右

翼でも左翼でも、どこの宗教でもどこの神さんでもかまへん。なんでもかんでもみんな嫌がらんで頭に入れたらええねん。そうすると自分の中で栄養だけ、ほんまもんだけ残っていく。それで人間的に精神的進歩いうものがある。これがええからこれが悪いから言うとなら人間としての幅が狭なってくるよ。これでは精神的には伸びない。もうちよっと幅を持たないとね。けど日本の宗教は全部狭い。それはちよっと考えもんやけどね。男性 なんでもええわという感じで、いい加減にやってくれという思いでね。法主 いろんなもの祀ったってかまへんよ。そんな滅多に喧嘩せえへんよ。

じんずうりきによぜ

「神通力如是」の真意をさぐる 第三十七回

大倭教の源流にさかのぼって

この神さん信仰してるから他所の神さん信仰したらいかんとか、大抵みんなそう言いよんねん。信仰とはそんなものと違うで。そんなもん、毎日ご飯と肉ばかり食うてみ、死んでまうで。やつぱりいろんなもの食うんで栄養というものになんねんから。ひとつの神さんをやってたら病気になる。あんたが行つてるところに行ったらええねん。嫌がったら一番あかんよ。

ここへ来る人でも、大倭で来る人もおれば仏教で来る人もおる。人のことでもこだわつたらあかん。大倭でする葬式でも仏教もあれば色々あかん。そんなんひとつのものにこだわつたらあかんから。信仰の世界でも幅の広い気持ちになつて

欲しいねん。どこの家でもほとんどが先祖代々仏教ということになるんや。仏教が日本の国教みたいになつとったからね。

拝むのは形だけのものであつてね、ちようど食事でもご飯食べた、洋食食べた、パン食べた、それに対して敬遠する必要もないねんからね。仏教もありがたい神道もありがたい、神さんありがたい仏さんありがたい、それでよろしいねん。うちにはなにしたらええなにしたら悪いという戒律はない。ほんまの神ながらの宗教やからね。それでまあ来る人の気持ちも楽やわな、こだわりないから。(続く)

今回紹介する原文はごく短いものですが、法主の思い入れが深い長曾根日子命(長髓彦)に関する重要な神語りが記されています。そこで法主の文章を少し長目に引用しながら、長曾根日子命や「すめらみこと」についての理解を読者とともに深めていきたいと思います。

原文

(十一月二十八日の続き)

「天照太神、宣フ。

大倭鷄杜ハ鳥類ノ鷲森ニアラズ。古ヘ天登比人ト云フ人アリケル。其人奇稲田姫命ノ御供シテ天降り玉フ。登比人代代永久ニ此地ニ鎮リ坐シテコノ奇稲田姫命ヲ守ルナリ。コレ後世ノ矢追家ナリ。其ノ登比人ノ霊、鷲トナリテ佳日ハ天ニ昇リピーヒヨロビーヒヨロト聲ヲ出シテ祝フナリ。矢追家ト云フ名ハ中古ヨリノ名、ズット／＼古ヘヨリ素戔鳴尊、奇稲田姫命ノ天降り玉ヒシ時ヨリ、御供シ奉リシモノナリ。其ノ登比人ノ霊長髓彦トナリ世ヲ治メ賊ノ汚名ヲ悲憤ノアマリ慨キ悲シミ居リ候。今コノ末法ノ代ニ出テテ其腕見セケレン。長髓彦ハ賊ニアラズ、之レ眞ノ忠臣ナリ。世界顛倒セルヲ以テ惡崇エ善キ人ハイレラレズ、惡ノ道ハ崇エ善ノ道ハ廢レタリ、其為長髓彦

賊ノ汚名ヲウケ未ダ悲憤ノ涙ニ暮ルナリ。ア、不憫ナルモノカ。吾レ其レヲ見ルニ忍ビズ、ワレ日聖ト世ニ出シ世界立直シノ役ヲ仰附ケタリ。日聖ヨ頼ムゾヨ、我が日本ノ為、天皇ノ為何卒御頼ミ申シ奉リマス。

如何ニ迫害アロウトモ汝ノ身ニハコタエマジ。汝ノグルリニハ其／＼ノ神神ガ守護シ玉フ。七面大天女、奇稲田姫命ハ倭姫トヘリ降り玉ヒ汝ノ仕事ノ手助けヲ為サム。七面大天女モ奇稲田姫命ノ靈即チ一體ナリ」題目。

日聖云ふ。註一、輪孺香の意。

〈解説〉長曽根彦についての法主の思い

長曽根彦の呼び名に関しては『古事記』では「登美能那賀須泥毘古」、「登美能古」や『先代旧事本紀』では「長髓彦」と表記されているが、いずれも狭野命（磐余彦・神武天皇）に対する朝賊として扱われている。ここでは『先代旧事本紀』の現代語訳からその取り上げ方を見よう。

《磐余彦の尊（第一代神武天皇）は天下を治めようとして挙兵し、東征を開始された。しかし方々で命令に背いて反逆するものは蜂のように群がり服従しようとはしなかった。中州の豪族、長髓彦は、もともと饒速日の尊の子であった宇摩志麻治の命を推して君主としてお仕えしていた。そこで長髓彦は「天つ神の御子がなぜお二人もおられるのか。自分はそのようなことは聞いていない」と申して、ついに軍勢を整えて防戦体制に入った。天孫の軍勢は連戦に及んだが勝利できなかった。

その時、宇摩志麻治の命は伯父の長髓彦の反逆には従わなかった。説得は無理であるとして長髓彦を殺害し、軍勢を率いて帰順された」（批評社刊『先代旧事本紀（現代語訳）』247～8頁）
このように書かれているのだが、それに対して法主は長曽根彦について全く異なった見解を持っている。そのことに關して法主の著書から引用して読者の参考に供したい。

まず法主は、長曽根彦やそれに関連したご自身のお役目について次のように語っている。

《それで私のお役目というのは、いま申しあげましたように、端的に言えば大倭神宮のあの場所が日本の本当の祖廟であると、日本のご先祖さんの場所であると、これを表に出して言うということなんです。

九州から神武さんが大和に來られたときは、これはもう奇稲田姫命さんの時代から何千年か後の話だと思っんですが、それまでは長曽根の大王さんが、北は若狭の方から南は熊野地方、いわゆる紀伊半島全部を治めておったわけやね。ところが、まあ金の鵄が出たとか、神秘的なことが言い伝えにはありますけれども、時の流れで政權を交代されたと思うんです。

その当時の大王さんというのは、ほとんどが皆、いわゆる靈覺者だと思っんです。靈界と現界とに通じておる巫女さんのような、靈界の分かっている人が王さんになったと思っんです。

長曽根彦の時代には大王さんは男だと言い伝えてますけれども、一番最初の王さんは奇稲田姫命、女の神さん、これが大倭の元祖ですわな。その人から代々、何千年という長い間、大倭の王さんという女性やっと思っんです。大倭ということばも、おおおやもとと言うことばやからね。

やつぱりある時代までは、歴代の王さんというのは靈界と現界の両方に通じておる人でないと王さんではなかったと思っんですね。

「魏志倭人伝」を見ても、卑弥呼というのは女の王さんやっらしいですね、その頃でも。

それで、丁度神武さんが出てこられたときには、たまたま大和の大王さんは男だったと思っんです。まあ、長曽根彦というけれども、長曽根というのは土地の名前ですから、後の人がナガゾネヒコとかトミヒコとか名づけたんです、その当時の大倭の大王さんと呼ぶのにね。

それがいろんな神秘的なことがあって、長曽根彦が九州から出てきた今でいう神武天皇に大和の國を全部渡して、いわゆる政權交代のようなことになったと思っんです。

まあ、近畿の一番よき國であったこの土地を、

九州から出てきた神武天皇に渡した、そんな國譲りの話が昔あったわけやけれども、この國譲りの話が、どうも出雲の國の國譲りの話と重なっているんですね。

それでこの大先祖さんは奇稲田姫命さん、須佐之緒命さん、饒速日命さんであり、饒速日命さんの別の名前は大國主命さんとも言うんやと。大倭神宮の靈地がそういう大先祖さんの祖廟であるんやと。そういうことが歴史から消されてしまっているのが、今の時代にその間違いを正さなきゃならないのが私やから、そういうような仕事をするのには、宗教団体のような形でなければやっていかれない。そういうことで、昭和二十年、大倭元年になりましたので、日本は法治國家やから宗教法人を作らなきゃいけないということで、昭和二十一年に宗教法人として大倭教を設立したわけですよ。『ながそねの息吹』「私の言っておきたいこと」300頁～301頁）

この中で語っている長曽根彦から神武天皇への「國譲り」とその後の長曽根彦の身の処し方について法主は次のように記している。

《（※狭野命＝神武天皇の軍は）苦戦に苦戦を重ね、天佑神助のお蔭によつて、近畿南部地方から作戦どおり磐余邑、磯城邑、葛城邑等を踏破してようやく大倭の中津國まで軍を進めたのであるが、いよいよ再び長曽根邑の精銳と激突したのである。『皇師遂に長髓彦を撃つ。連に戦ひて取勝つこと能はず』（紀）で高千穂軍は連戦連敗となり、もはや窮地に陥つたとき、その戦の上空にわかに曇り水雨降り金鵄が輝いた。この奇瑞によって勝敗なく両軍は戈を収めたのである。（中略）

長曽根日子命は勝鬨を挙げる寸前に靈鵄の瑞光が狭野命を指したので、協和の光と感じ取り直ち

に停戦を命じた。大君の至上命令と受け取った長曾根邑の人々は黙然として戈を収めたものの、勝ちに乘じた勢いの向かうところ再度の決戦を予期して待機していたのであった。こうした状況の中に長曾根日子命は天啓を拝して使者を狭野命のもとへ遣わして、左の如き意味の条件を申し入れたのである。

一、狭野命をもって大倭の「すめらみこと」に即かせること。

一、正妃は大倭から冊立し、吾平津媛は退けること。

一、二代の「すめらみこと」は正妃の腹から生まれます御子をもって嗣がせること。

一、太古より長曾根邑に鎮まります天津神、国津神、八百萬神に礼をもって順応帰一し、祭政一致の実をあげることに。

一、皇位の護衛は大倭の精鋭をもって任ずること。一、古き世から神のまにまに顕出した大倭の社会機構はそのまま存続させること。

一、両軍戦没者の靈魂は長曾根邑の祖霊地において鎮めまつること。以上

狭野命は直ちに群臣を集めて評議したところ、この申し入れのすべてを無条件にて受諾することになった。妃吾平津媛の心境は誠に悲痛なものがあつた。狭野命は完全に大倭の婿養子になる形となつてしまった。

こうした講和の情報が流れだすにしたがつて大倭の人々の憤怒は日とともに高ぶり、「すめらみこと」の更迭に関する疑念の情は濃厚の度を増しつつ、やがては再び大倭を戦禍の巷に化せんとし、軍を構える態勢は目睫に迫ってきた。この実情を見てとつた長曾根日子命はもはや人力の限界を知

り、朝露の日に向かつて消えるに似たるわが命を神の御前に捧げまつり、大倭の弥栄を祈ることを決意したのである。

「悠遠なる神代より今に至るまで、天津日嗣の大業は天佑神助のお蔭を蒙りてどこおりなく果すことができた。時は正に高千穂と大同融和の機熟するの秋である。大倭の群臣達がもつ忠君愛国の至誠の尊きを知るといへども、思うにわれ世に在る限り、狭野命は高御座に即位し給うこと不可能である。われは大和を生むための礎であることを悟りたれば、現世を去ること最良の道と心得たり、後々までも現世のことは神議りますよう、恐み恐みも祈る。」

額ずきて神に誓つた長曾根日子命は、大倭の人々に「神慮の深遠なるを悟り、我が死をもって意義あらしめよ」と伝言し、従容として自決して果てたのである。ああ大倭に咲き匂う精華一輪、実を結んで無常の風に散り去つたのである」

『やわらぎの黙示』『日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと』133頁～138頁

この長曾根彦の心境について法主はこう書き記している。

《至誠はいつの時代か天に通ずるものである。長曾根日子命は余りにも今の世の人々に知られていない。誠に遺憾至極であるが、私は命の心中を察するとき、これこそ日本精神の権化といいたいのである。現在注目されつつある日本精神の源流は、この辺に求むべきものではなからうか。仮にこの命が架空の人物であつてもよい、然し上代の我々の先祖達の心の中に生きていた事実は、記紀の記録によつて実証できる。但しこの種の記録は当時の帰化人や御用学者の巧みな筆によるものなれば、大倭を朝敵の立場に置くことは何の疑義も挟

まないが、その記紀の中に長曾根大君がもつ精神内容の片鱗を窺い知ることができるのは不幸中の幸いといえる。

長曾根大君は終始神威を奉戴して行動をとつた人のようである。時の流れに逆らわず、機を見ては抱擁同化しながら神ながらの大道をはずさず、常に新しいものへと進めてゆく。こうした転化は一人この大君に限らず、現在の日本人の血潮の中に今日唯今も脈々として生きているものではなからうか。

アジア大陸の東はづれに位する孤島日本国、幾度か大陸の嵐に襲われながらも敵としてゆるぎなき今日のわが国在るを思うにつけ、私の心はひたむきに長曾根大君のもとへ走るのである》(同上139頁)

「すめらみこと」について 林 修三

過日、青森県の大倭会会員である高橋延之さんから「法主様は『すめらみこと』の役割について何か書かれているでしょうか」という質問状が届いた。確かに『神通力如是』の中にも、天皇(すめらみこと)を讃え、その尊さ、ありがたさ、あるいはその威光のためたさを語る文章が何度にもわたつて表れる。

そこで、高橋さんのご質問に答え、皆様の『神通力如是』への理解の一助にも供すべく、法主が「すめらみこと」に関して直接言及されている文章を探してみた。以下はそのことを記した高橋さんへの返事である。

高橋延之様

一昨年の大倭文化行事での一別以来ですが、お元気ですか。

突然の速達で少々驚きましたが、早速ながら

「法主様は『すめらみこと』の役割について何か書かれているのでしょうか」のご質問に私の知る範囲でお答えします。

まずは昭和39年6月23日の月次祭法話(『とおやまと』平成23年6月号)から。

《…天皇の資格という意味の「すめらみこと」という言葉があります。「みこと」は神の命、それに従って「すめら」していく、要するに神意を察して世の中に知らせ、世の中を治めていく者ということなんです。だから「すめらみこと」は、霊界と現界とに通じてなきやいけないんだけど、現在の天皇の肉体は我々と同じで、その中に納まっている霊魂というものが、日本民族の代表としてお生まれになった天皇の魂、「すめらみこと」なんです。

そういうような一つの霊格を持った者が民族の上におることにおいて、その一つの波長が国民全体の上に御稜威として流れて来るんです。だから、いわゆる五感を通して肉体上の天皇みたいなものは、頭悪かったかて片輪であつたかて、木偶の坊であつても構わないんです。

また、『ながそねの息吹』271頁には、『現代人にみる権力、権威、武力、名譽、金権などのような欲望は古代人には必要ではなかった。ただ必要なのは神の心を知ることだけである。神意は古代人には絶対至上であつたので、彼らの生活一切は、神意を中心として統一され、調和が保たれていた。巫女と沙庭(審神者)はこうした情勢下にあつては、人間として集落の中心的存在となり、神聖な神の代理人として人々から崇敬されるようになる。沙庭が部族民に神の心を伝え、神の心に随う生活百般を指示する。部族民は無条件に受け入れ行動に移すのである。こうした意味をもった多くの沙庭が後に言うスメラミコト(天皇)

の原始形であつた』とあります。これで納得いただけるでしょうか? 以上思いつくままに御答えしました。またの再会を楽しみにしています。

5月20日 林修三 拝

■お知らせとお詫び 今回は紙面の都合もあり現代語訳を掲載出来なかったことをお詫びします。次回に次回分と併せて掲載いたします。

岡山県美甘 田中家訪問記

去る7月1日邑の杉本一家4人で湯浅晴子さんの生母、故田中一二三さんに会いに(?)行ってきました。朝7時半レンタカーで邑を出発。

一二三さんは令和6年8月20日に帰幽されましたが、虫の知らせか帰幽のひと月前、一家で美甘の一二三さんにお会いしてきていました。

しかし帰幽祭には私(順一)ひとりしか参加できず(大倭の関係者は多数参加)、体調不良の志津女が最後のお別れが出来なかったので、家族には心残りとなりました。その思いもあつて今回の美甘行きとなりました。

失礼を承知で予告なしの田中家訪問でしたが、湯浅芳郎、晴子夫妻がびつくりしながら喜んでくれました。

少し遅れて、日頃から田中家と家族付き合ひのある江田さん、時々邑においでになる晴子さんのいとこの山崎基央さんも来てくださり一二三さんの思い出話に花が咲きました。

草刈りで真っ黒になられた山崎基央さんが時々草刈り中にママシを切ってしまうことがあり、いつもごめんなさいと言いつつ土に戻すという話しがきっかけで話題が展開しました。

○いつも田中家の応接間で踊りの師匠をされている一二三さんでしたが、踊りの稽古が始まると

この家に住む青大將がシュルシュルと鴨居のあたりから踊りを見に来ていたと言います。

○ある日一二三さんの主治医がストラディバリウス(バイオリンの世界的名器)を持参し、いろりの間で演奏された時のこと。晴子さんが「こんなことをしてもらったら、他の人が噂を聞いてうらやましがります。如何したらいいでしょうか」と言ったら、先生は「音楽療法だと言うことじゃない」と。晴子さんが先生にお礼や花束などの用意をしてなかったの一二三さんにこっぴどく叱られたそうです。

○一二三さんの七日毎の連夜参りに近所の方をたくさん呼んだのですが、お父さん(晴子さんの父)は「優しくていい人だった」と、先生(一二三さん)には「いつも怒られてばかり」と話されていたとのこと。

○一二三さんの遺影はキリッとした写真を選んだが「しつかりしなさい」といつも怒られてるようだと芳郎さん。(杉本順一)

表紙の絵画について

表紙の「ひまわり」の油絵を描いた松下広美さんの作品は、これまでにも何回か本紙で紹介しています。松下さんは大和郡山市の「みんなの広場らんまん」を創作と生活の場として精力的に作品作りに取り組んでいます。オランダの画家・ゴッホに彼があこがれていることもあり、今回は「ひまわり」の絵の一部をトリミングして使わせていただきました。

法主・言の葉

心の世界、魂の世界に於てのみ、絶対平和建設は可能なんだ。

『やわらぎの黙示』58頁

あじさい日誌

6月7日 午後6時から大倭会館において大倭町自治会役員会が開かれました。

6月8日 午後2時から大倭会主催の祓会が開かれました。

この日は半年ぶりに宮津の藤本宏秋さんが参加。

また大倉有宏さんに誘われて初めて合田晃さんが参加されました。

6月9日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

6月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

6月23日 午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が開か



れました。

6月30日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

6月号の反省会。7月・8月号の編集予定等。苦勞するのが表紙写真探しです。読者の皆さんの投稿も歓迎です。

7月6日 午前8時から大倭墓地の掃除。開始時刻前に教長家

東光大祭 祭典のご案内

令和7年9月6日(土曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わる次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は8月5日まで。日数に限りがありますので、お忘れのないようお願い致します。

※9月6日10時30分より大倭神宮の月次祭が行われます。

麻呂さん、中村千久佐さん、矢追明昌さんで大半が終了。

午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

三重県名張市の且田容子さんと米国在住の娘のホールデン綾子さん、孫のイーライ・ホールデンさん(兄)、イーサン・ホールデンさん(弟)の一家が参拝されました。

午後6時半から大倭会館で倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では6月10日 人事プロジェクト会議が行われました。その中で特定技能海外人材の育成と定着のポイントについての研修もありました。

(菅原園) 6月21日 今月誕生日の方がホールに集まりお誕生日会を開催しました。職員が目の前でクリムを塗ったりデコレーションをして、誕生日の歌を歌って皆で美味しく頂きました。

6月24日 バスで滋賀県の琵琶湖博物館へ行きました。バスの中では職員やご家族と一緒に話をしたり自己紹介をしたりしました。昼食の松花堂弁当を頂き、食後は水族館の見学、めんたいパークで買い物など楽しめました。ご家族と過ごして嬉しかったです。

(須加宮寮) 6月12日 単独水害避難訓練を行いました。放送が流れると階段

段を利用できる方は階段で、車椅子の方はエレベーターで3階へ垂直避難を行いました。

6月24日 音楽療法があり、先生が持参された紫陽花を見て「きれいだな」と話されていました。リクエストのあった曲や季節の曲を歌いました。

(長曾根寮) 6月13日(日) 裏のビワの木に成った実を取直し、皆さんと一緒に頂きました。

(特養) 施設周辺にて紫陽花見学を行いました。フロアでは紫陽花のイラストを飾りつけ、季節を感じてもらいました。

(茂毛路園) 6月27日 午後より定例懇談会を開催しました。今回は10名のご利用者に参加してもらい、「趣味が映画鑑賞」という方がおられたので、皆さんに好きな映画のお話をしてもらいました。そして、最後には恒例のカラオケを実施しました。

(八重垣園) 6月25日 天候不良や暑さでなかなか紫陽花を見に行くことが出来なかったので、折り紙を使って紫陽花を皆で作りました。

色とりどりの紫陽花の花が出来て喜ばれていました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

8月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会祓会

8月10日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。

これに先立ち午前8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*大倭立教開宣祭

8月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

8月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼前号に続いて時期が確定できない法主の座談を今号でも紹介しますが、法主が相手に応じて自在に語る即興の味を楽しんでください。▼本年の5月号から「法主・言の葉」という欄を始めています。短い言葉の中に込められた言葉の力が響いてきます。

▼2段目の写真は倭神宮近くの田んぼで仲良く並んでいるアオサギとダイサギ(ついで、4段目の写真は北海道小樽市在住の本紙編集部守谷明宏さんのラベンダーです。(哲)

